

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

山を友に41年 ing 藤松太一著

かつて山岳総合センターの主事をされていた藤松太一さんをご存じだろうか？信大の山岳部OBでこれまでネパールヒマラヤの2つの未踏峰（ニルギリ、ギャジカン）に初登頂しているのをはじめ、その足跡はヨーロッパから南米、アラスカまで世界中に及んでいる。やや旧聞には属する話題だが、その藤松さんがこの春退職されたが、それを期にこれまで41年間の自らの登山経験をまとめた本（写真集）を出版された。

山に目覚めた大学時代、ヒマラヤを初めとする海外遠征に明け暮れた時代、そして山スキーなど山の楽しみを知った中高年になってからの時代という3部で構成されており、そのほとんどはカラーの写真である。題名の「41年 ing」はこれからも山に関わり続けたいという思いから名付けたという。実は、今夏の遠征に行く前の5月、松田、山内、大西の3人で針ノ木にスキーに行った帰り、温泉につかっているときに会ったのだった。一冊3000円。もしご希望の向きは、著者までご連絡を。住所 386-0034 上田市中之条609 藤松太一さんまで。

ヤスィックアケルの蒼い空 2 やっとこの日がやってきた

2011年7月16日未明の2時30分。昨日はわが家の山の神が東京にて同級会、最終のあずさでご帰還であるとのこと。中国行きの準備も済んでいないし、早くから寝ても寝られるはずもない。そんなわけでバタバタとしているうちに女房殿の帰宅時刻。1時過ぎにそれでもちょっと横になったら少しは楽になった。2時に起きて、荷物の最終チェックをおわったところへ、名古屋まで送ってくれることになっている下岡先生（筑摩高校）がやってきた。すでに、山内、三戸呂、松田の3人も車に乗っている。いよいよこの日がやってきた。新婚早々で奥さんが名古屋まで送ってくれる佐藤君と待ち合わせをするため松本合庁へ。塩尻志学館高校の横内先生が、「壮行会に出られなかったので・・・」と深更？早朝？にもかかわらずわざわざ見送りにきてくれた。最後までいろいろな人が応援してくれているのが本当に嬉しい。

飯島町で久根さんをピックアップして、今回のメンバーが全員そろった。6:15にセントレア空港に到着。大所の荷物はすでに中国におくってあるのだが、やはりそうはいっても持って行く荷物は通常の旅行者に比べれば遙かに多い。以前はそんなにチェックは厳しくなかったが、9.11以来荷物のチェックや重量制限が厳しくなっている。ややトラブった部分もあり、チェックインが終わったのは8時を回っていた。隊員の一人佐藤君は重要な隊員だが、それと同様に信濃毎日新聞社の派遣した同行記者という顔も持っている。なかなか搭乗口へ来ないと思っていたら、空港内のインターネットを使って早速出発の記事を本社へ送っていたという。便利になった分だけ、仕事が増えるという典型である。そこへ行くと僕などは極楽とんぼ。これから36日間は全く、コンピュータや携帯などから解放された自分の時間を使えるのだから・・・。その佐藤君に、家族との別れをしていてなかなか搭乗口にこない松田隊長（こちら奥さんが娘さんと空港までわざわざ見送りにきてくれていた）に代わって出発前のコメントを求められた。「とりあ

えずここまで来ることができたというのが、正直なところである。いいメンバーに恵まれた登山隊だと思う。僕は正直ここまで、自分で旗を振ってやってきたが、このいい仲間と全員で愉快な登山をしたいと思う。とにかくここまでが長かっただけに感無量である。」というようなことを言った。ここまでの道のりは順調とはいえなかったし、まだ何があるかわからない。しかし、とにかくここまで来た。なんとか全員で出発だけはできそうだ。そのコメントを持って佐藤君はまた、インターネットのブースへと飛ぶ。忙しい新聞記者である。離陸時間ギリギリになって、今回の遠征用に取得したGメールでは写真がうまく送れないといいながら、乗り込んできた。

・・・日本を発って3時間、12:20 北京に到着。乗り継ぎは余裕をみてあったので、約4時間という北京空港での缶詰の時間は長かった。おまけに昨日からろくに寝ていないので、なんだか身体が自分の物でないようなふわふわした感じ。さあよいよ搭乗という時間になって、さらに遅延の表示が出て、一同がっかり。それからの1時間半の長いこと。その上、搭乗した時間が夕刻のラッシュ時と重なり、超ローカルラインのウルムチ線などは真っ先に後回しとされ、機内でさらに1時間以上待たされた。前途は多難である。結局離陸したのは当初より3時間40分も遅れた19:50。ウルムチに到着したのは、22:15であった。・・・22時とはいいが、全国で北京時間を標準タイムとしている中国のこと。その西のはじ、新疆ではまだようやく日が沈むところ。飛行機の上から天山山脈ボゴダ峰の夕焼けを眺めながらのフライトは悪くはなかった。

空港ターミナルを出ると、これから36日間、ずっと世話になるヌルマイマイティさん（以下ヌルさん：私の友人で今回の通訳、コック、連絡官、ガイド役）が迎えに出てくれた。トルコに留学しているという息子さんも一緒である。「遅れましたね。さすが、中国。」といつもながらユーモアを交えての出迎えである。空港の外に出るとぽつりぽつりと雨があたる。「ここ数日天気が悪くて。」とヌルさん。私にとって砂漠の雨は珍しいことではないが、これから先が心配である。「今回のホテルは市街地にしました」と城市ホテルへと案内してくれた。久しぶりの再会を祝して、ラーメンとビールで乾杯、といってもヌルさんは敬虔なイスラムで酒は飲まないで、こちらだけが杯を挙げたのだが。まずは無難な滑り出し。

情報収集と登山準備 1

17日、ホテルから東向きの窓を覗くと高層ビル越しにボゴダの連山が見える。朝食前に松田さんと散歩に出る。町が年とともに都会化し、以前は町のそこそこで感じたシシカバブを焼くコークスの臭いがしなくなっている。それは、とりもなおさず漢化であるということの証拠でもある。10:20にウルムチ空港へ向かう。ウルムチ空港はヌルさんに言わせれば、中国国内でも指折りのチェックの厳しい空港とのこと。昨年もピッケルの持ち込みで一悶着あったが、今年は佐藤君の託送荷物の中の大量のカメラ用、PC用のリチウム電池が問題だとされた。それが駄目だと取材に関わるわけで、一瞬青ざめたが、機内への持ち込みならOKとのこと一件落着。カシュガルまでの2時間の空の旅は、右手に天山山脈を展望しながらの贅沢な旅となる。離陸して40分ほどで、米所としても有名なアスの大きなオアシスが見えてくる。その向こうに一際目立つピラミダルな峰はトムール(7443m)、その右の双耳峰はハンテングリ(6995m)か。7000mの峰々の姿はやはり抜きんでており圧巻であった。